

## 虐待を受けた少年達の「生」

松本 聡子／秋山 剛／田島 秀紀／浅野 千晶／  
吉永 千恵子／野村 俊明／酒井 佳永／三宅 由子／  
アキスカル・ハゴップ／アキスカル・カリーン

### はじめに

虐待とは一般に、身体的虐待と性的虐待、ネグレクトおよび精神的虐待の4種に分類される。

児童虐待防止法第2条においては、身体的虐待は「児童の身体に外傷が生じ、又は生じる恐れのある暴行を加えること」、性的虐待は「児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること」、ネグレクトは「児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による前二号又は次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること」、精神的虐待は「児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと」と定義されている。

児童虐待は米国では1980年代に注目されはじめ、深刻な社会問題となったが、わが国においてはそれより約10年遅れて社会問題として注目を集めはじめた。

2000年5月17日に第147回通常国会において児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）が成立してからは、厚生労働省発表によるわが国の子ども虐待相談件数は増加の一途をたどっており、たとえば2004年度

(32979 件) は 5 年前 (2000 年度 : 17725 件) の約 2 倍、10 年前 (1995 年度 : 2722 件) の約 12 倍となっている (田村ら、2006)。そうした背景のもと、虐待に関する研究も近年盛んに取り組まれつつある。

先行研究から、虐待を人格発達期に長期にわたり繰り返して体験し続けると、心的外傷の結果として、自己や他者に関する複雑で深刻な認知の歪みや特異な人格特徴を呈することがあることがよく知られている。

また、不安障害やうつ病、身体化障害、行為障害、物質関連障害、摂食障害、人格障害などの形で表現されることもある (田村ら、2007)。

さらに、非行や犯罪は単純に 1 つの原因から生じるのではなく、生物学的資質や文化・社会的背景、家族・交友関係、社会的支援資源の有無など複数の因子の複雑な相互作用の結果として生じる現象でありながらも、非行少年には虐待の経験者が多いことが経験的に知られており、2001 年に法務総合研究所が行った調査研究の報告 (法務総合研究所、2001) でも、調査の対象となった少年院在院者の 70% 以上になんらかの被虐待経験があり、約半数に家族からの被虐待経験があったことが明らかとなったため、虐待という心的外傷体験と非行や問題行動、犯罪の関係についても近年改めて注目され、研究がなされつつある。

これらの中でも、非行・犯罪は、本人達にとっては法的な処罰という今後の人生に関わる事態を招き、さらに被害者達の死生の意味づけに大きな影響を及ぼしうる出来事であることは言うまでもなく、また、気分障害に関しては特にうつ病相における自殺および無理心中と結びつくこともあり、これもまた本人および他者の死生に深く関わる可能性がある。そして、人格あるいは気質の変化も、もちろん本人の死生のあり方を大きく左右するものであろう。

そこで、本研究では、虐待が少年達の人生に及ぼす影響について、「気質」と「非行・犯罪」と「気分障害」という 3 つの側面から検討することを目的とした質問紙調査を行った。

## 方法

本研究は、対象者に対して自己記入式質問紙および面接を行って調査を行った。以下に、調査内容と対象、調査手順および解析方法について示す。

### 1. 調査内容

本研究では、以下の1)の尺度を使用した。また、調査対象施設に所属する心理技官による個別面接により、以下の2)に関する情報を得た。さらに、3)に関しては、調査対象施設が、警察より得た情報を使用した。

1) The affective temperament scales of Memphis, Pisa, Paris and San Diego : self-rated auto-questionnaire version (TEMPS-A)

TEMPS-A は Akiskal ら (Akiskal et al., 1979; Akiskal and Mallya, 1987; Akiskal HS et al., 1998; Akiskal et al., 2005; Placidi et al., 1998) により作成・発表された、気質を特性論の立場から、つまり、多数の構成因子を量的に測定した結果の組み合わせから個人的性格を測る自記式質問紙である。

TEMPS-A は 110 項目からなり、①抑うつ気質 (項目 1 ~ 21 : 計 21 項目)、②循環気質 (項目 22 ~ 42 : 計 21 項目)、③発揚気質 (項目 43 ~ 63 : 計 21 項目)、④焦燥気質 (項目 64 ~ 84 : 計女性 21 項目、男性 20 項目)、⑤不安気質 (項目 85 ~ 110 : 計 26 項目) の 5 つの気質を測定する尺度で構成されている。

抑うつ気質とは、うつ病性障害の病前性格として Tellenbach により指摘されているメランコリー親和型性格に類似した概念である。これらの性格特徴としては秩序を重んじ、几帳面で完璧主義、強迫的傾向、抑うつに陥る傾向、悲観的な傾向が挙げられている。

循環気質とは、躁うつ病の病前性格として Kretschmer が唱えた概念を受け継いでおり、行動的特徴として仮眠と睡眠欲求の減少、内向的な自己への沈潜と抑制のない他者への希求、無口と多弁、主観的特徴としては無気力と

快調、緩慢な応答と鋭敏な思考、悲観と楽観、自信のなさや自信過剰、などの間を数日ごとに行き来することが挙げられている。

発揚気質とは、陽気で快活、楽観的、自信過剰、外向的、抑制がない、刺激を求める、習慣的に睡眠時間が短い、などの傾向を特徴とする気質である。

焦燥気質とは、些細なことでイライラしたり、といった、刺激への脆弱性を特徴とする。

不安気質とは、抑うつ症状と不安症状は別のものであるという見地から成っており、不安感、緊張感の高まりやすさや神経質といった特徴が挙げられている。そして、抑うつ、循環、発揚、焦燥気質は気分障害、不安気質はうつ病に関連する不安障害の病前性格とされている (Akiskal HS and Pinto O, 1999; Matsumoto S et al., 2005; Mendlowicz MV et al., 2005)。

また、酒井ら (2005) は、TEMPS-A で測られた気質は職業性ストレスと深く関わりがあり、気質が直接、あるいは認知や問題対処を介して抑うつ症状変動に寄与している可能性があるとの調査結果を発表している (Sakai Y et al., 2005)。

さらに、Akiskal は 1983 年に、双極性障害の概念の拡張を目的とし、双極スペクトラムという概念を提唱している。これによると、「境界性人格障害を『人格障害』として捉えて精神療法を主たる治療法とすることは誤りであり、気分障害として捉え、気分調整薬を投与すべきである」「双極型気分障害は、社会適応、対人関係、薬物乱用に影響する」等、気分障害の概念を拡張した上で、多くの症例を双極スペクトラム概念として捉える必要があると提唱し、TEMPS で測ることのできる気質概念の有用性を説いている (秋山ら、2007)。

採点方法に関しては、各項目を「はい」「いいえ」の 2 段階で評価した後、「いいえ」の回答には 0 点、「はい」の回答には 1 点を与え、各尺度ごとに項目全体の平均点を算出し、それを尺度得点とする。結果、計 5 つの気質の尺度得点を得、尺度得点が高いほどその気質の傾向が強いことが表される。各気質の尺度得点（「抑うつ気質得点」「循環気質得点」「発揚気質得点」「焦燥気質得点」「不安気質得点」）の得点範囲は 0 点～1 点である。

TEMPS-A の日本語版は、原著者の同意を得て秋山らが作成し、2001 年 4 月に 426 人の健常者を対象に調査を施行した結果、信頼性と妥当性が確認されたものである (Matsumoto S et al., 2005)。

## 2) 被虐待経験

本研究では、過去に受けた精神的虐待と身体的虐待、ネグレクトの経験についての情報を得るため、調査対象施設の心理技官が対象者と個別に半構造化面接を行い、3 種の虐待各々について、「まったくなかった」か「(1 回でも) あった」かについて確認した。

「まったくなかった」に分類されたものを「虐待なし群」、「(1 回でも) あった」に分類されたものを「虐待あり群」とし、それぞれに 0 点、1 点を割り付けた。したがって、精神的虐待と身体的虐待、ネグレクトそれぞれについて、0 点もしくは 1 点の点数が与えられるため、これらの得点を、「精神的虐待得点」「身体的虐待得点」「ネグレクト得点」とした。

## 3) 年齢と非行名

非行名とは、対象者が調査対象施設に入所する直接の原因となった問題行動の罪名である。

分類は、調査対象施設および警察が有する書類の都合上、「自動車もしくは単車の窃盗」「自動車もしくは単車以外の窃盗」「恐喝」「傷害もしくは傷害致死」「強盗」「道路交通法違反」「薬物関連の犯罪」「ぐ犯 (将来法を犯す行為をするおそれがある少年)」「その他」とした。

これらの情報については、調査対象施設が警察より得た、対象者に関する記録を使用した。

## 2. 対象

本研究の調査対象施設は、関東に位置する 2 つの少年鑑別所である。

少年鑑別所は昭和 24 年の少年法および少年院法の施行により発足した法

務省所管の施設であり、刑罰法令に触れる行為をした、あるいは罪を犯す恐れのある少年達を、家庭裁判所の決定によって数週間～数ヶ月程度の間、専門的な調査や診断を行うことを目的として収容するために各都道府県庁所在地など全国に52箇所設置されている。

本研究の対象は、調査期間中に調査対象施設に在所していた男子入所者281名とした。

### 3. 手順

調査期間は2001年10月24日および11月28日であり、調査対象施設の職員が対象者達の居室に一斉に配布・回収を行った。

なお、本研究はNTT東日本関東病院における倫理審査委員会の承認のもと、行われた。

### 4. 統計解析

TEMPS-Aで測る気質と虐待の関係について検証するため、TEMPS-Aにより得られた抑うつ気質得点、循環気質得点、発揚気質得点、焦燥気質得点、不安気質得点の各々の中央値以上のものを「高」=1、中央値未満のものを「低」=0とコード化しなおしたものを従属変数とし、精神的虐待得点と身体的虐待得点、ネグレクト得点を独立変数とした、計5パターンのロジスティック回帰分析を行った。

解析にはSPSS for Windows ver. 16.0 Jを用い、有意水準は両側検定で5%とした。

## 結果

### 1. 基本属性

対象者の平均年齢は16.9 (SD=1.5) 歳であった。

非行名は自動車もしくは単車の窃盗が5.8%、自動車もしくは単車以外の

窃盗 21.1%と、窃盗に関わる犯罪が最も多くの割合を占め、次いで傷害もしくは傷害致死が 19.3%、恐喝が 12.0%、強盗が 7.6%、道路交通法違反が 10.0%、薬物関連の犯罪が 4.3%、ぐ犯が 3.7%、その他が 16.2%という結果となった。

平成 15 年における全国の少年鑑別所の新収容者の年齢層別構成比は、中間少年（16 歳および 17 歳）が 40.5%と最も高く、次いで年長少年（18 歳以上）が 39.4%、年少少年（15 歳以下）が 20.1%となっており、本研究の対象者の年齢構成と概ね一致している（法務総合研究所、2004）。

また、平成 15 年における全国の少年鑑別所の新収容者の非行名別構成比は男子に関しては窃盗（自動車および単車の窃盗を含む）39.7%、傷害 14.7%、恐喝 8.6%、強盗 6.7%、道路交通法違反 12.7%、薬物関連の犯罪 2.4%、ぐ犯 2.0%と、本研究の対象者の非行名別構成比と概ね一致している（法務総合研究所、2004）。

したがって、本研究の対象者は関東に位置する 2 箇所の少年鑑別所の男子入所者のみを対象としたものではあるが、サンプルの代表性はある程度確保されていると考えられる。

## 2. 被虐待経験

本研究の対象者は、身体的虐待に関しては「まったくなかった」：「(1 回でも) あった」は 39.8% (N = 111) : 60.2% (N = 168)、精神的虐待に関しては「まったくなかった」：「(1 回でも) あった」は 71.1% (N = 199) : 28.9% (N = 81)、ネグレクトに関しては「まったくなかった」：「(1 回でも) あった」は 81.1% (N = 227) : 18.9% (N = 53) であり、一般のサンプルの値と比し、高い値が示された。これは、先行研究とも一致している（法務総合研究所、2001）。

### 3. 気質

抑うつ気質得点の平均点は 0.29 (range 0.00-0.76)、循環気質得点の平均点は 0.33 (range 0.00-0.86)、発揚気質得点の平均点は 0.43 (range 0.00-0.86)、焦燥気質得点の平均点は 0.20 (range 0.00-0.85)、不安気質得点の平均点は 0.27 (range 0.00-0.92) であった。また、各気質得点の中央値は、抑うつ気質は 0.29、循環気質は 0.33、発揚気質は 0.43、焦燥気質は 0.20、不安気質は 0.27 となった。

この結果を踏まえ、各々の気質に関し、中央値以上のものを「高」= 1、中央値未満のものを「低」= 0 とコード化したものを従属変数とし、精神的虐待得点と身体的虐待得点、ネグレクト得点を独立変数とした、計 5 パターンのロジスティック回帰分析を行った結果、抑うつ気質はネグレクトと有意な関連 (odds ratio = 3.7,  $p < 0.001$ ) が認められ、循環気質は精神的虐待と有意な関連 (odds ratio = 2.1,  $p < 0.05$ ) が認められ、焦燥気質も精神的虐待と有意な関連 (odds ratio = 2.5,  $p < 0.01$ ) が認められた (Table 1 ~ 4)。また、不安気質に関しては、どの虐待とも有意な関連は認められなかった。そして、発揚気質に関しては、回帰式自体が成立しなかった。なお、いずれも共線性の問題は見られなかった。

## 考察

1. 本研究の結果、抑うつ気質はネグレクト、循環気質と焦燥気質は精神的虐待と有意な関連が認められた。

様々な先行研究 (Bagley C and Mallick K, 2000; Carter JD et al., 2001; Craig RJ et al, 1998; Harrington D et al, 1998; Johnson JG et al., 2001; 小林, 1996; Widom CS, 1989) により、虐待は人格障害の発症も含め、人格 (気質) になんらかの影響を及ぼす可能性が高いと考えられている。

たとえば、古田ら (2002) は、矯正施設の入所者のうち、虐待経験者と未経験者の気質の比較を MJPI (Ministry of Justice Personality Inventory) とい



Table 1. Depressive temperament

	B	SE	Exp(B)	Wald	p
physical abuse	0.38	0.27	1.46	1.96	0.16
psychological abuse	-0.54	0.32	0.58	2.87	0.09
neglect	1.31	0.40	3.70	10.89	0.001

$\chi^2=0.99$

Table 2. Cyclothymic temperament

	B	SE	Exp(B)	Wald	p
physical abuse	0.12	0.27	1.12	0.19	0.66
psychological abuse	0.75	0.31	2.11	5.76	0.02
neglect	0.45	0.35	1.57	1.61	0.21

$\chi^2=1.65$

Table 3. Irritable temperament

	B	SE	Exp(B)	Wald	p
physical abuse	0.49	0.27	1.63	3	0.07
psychological abuse	0.93	0.33	2.54	8.12	0.004
neglect	0.40	0.37	0.49	1.18	0.28

$\chi^2=3.19$

Table 4. Anxious temperament

	B	SE	Exp(B)	Wald	p
physical abuse	0.26	0.27	1.29	0.94	0.33
psychological abuse	0.46	0.30	1.58	2.30	0.13
neglect	0.53	0.34	1.70	2.36	0.12

$\chi^2=1.97$

う尺度を用いて比較した結果、虐待を受けたものはより神経質で、被害感が強く、抑うつ的で、落ち着きのない自己顕示的な性格特性を示す結果であったことを報告している。

しかし、本研究は TEMPS という、双極スペクトラムとの結びつきが強い性格質問紙を使用した点がこれまでの先行研究と異なる点である。

虐待と気分障害の関係に関しては、北村（2003）や田村ら（2007）が、虐待は気分障害の発症年齢や重症度、他の精神疾患の合併などについて影響を及ぼすとの報告を行っている。しかし、児童思春期を中心とした若年層の気分障害に関する研究は近年増加しつつあるとはいえまだ十分な蓄積があるとはいえないというのが現状である。

本研究では、ネグレクトおよび精神的虐待は気質との有意な関連が認められた一方で、身体的虐待は気質との有意な関連が認められなかった。

本研究で身体的虐待が TEMPS で測られる気質との有意な関連が認められなかった理由は明確ではないため、その点については今後さらなる検討を要すると考えられるが、いずれにせよ、ネグレクトや精神的虐待は、身体的虐待と比べて目に見えにくいものであるだけに発見が容易ではないため、学校の教師等は子供の性格的な変化や気分障害およびうつ状態や躁状態の存在により敏感になる必要があると考えられ、それを支援するツールとして、TEMPS-A が活用できる可能性がある。

2. 本研究においては、躁うつ病の病前性格として Kretschmer が唱えた概念を受け継いだ循環気質と、躁的な傾向と関連を持つと考えられている発揚気質が、日本の企業に勤めている人々と比較して高い値が示された (Matsumoto et al., 2005)。

両者の基本属性に相違は多々あると思われるものの、少年鑑別所に収容されている少年達には、先に述べたような気分変動や抑制が欠如しがちで刺激を求める傾向が強いことが示唆されるといえよう。

気分障害と犯罪の関係については、うつ状態における犯罪には殺人などの重大なものが見られ、躁状態での犯罪は道路交通法違反や器物破損、窃盗な

どの比較的軽犯罪が多いことが成人を対象とした研究で示されているものの、児童思春期を中心とした若年層を対象とした研究はほとんど存在していないのが現状である（工藤、2005；中谷、2007）。

しかし、野村ら（1999、2000）は、児童思春期の気分障害は成人の気分障害と比較して病像の非定形性や頻回な病相の反復、気分動揺の振幅が軽微などの特徴が認められ、また、児童思春期独特の気分の変動の激しさゆえに逸脱行動や非行が患者の性格に帰されやすいため、成人と比べて双極性気分障害の診断をつけにくかったり、見落とされやすい傾向があることと、軽躁状態と逸脱行動の関連は評価が難しいがゆえに気分障害に基づく逸脱行動に対し適切な処置がなされにくいことを指摘した上で、双極性障害を念頭に置いた精神医学的治療により非行性が顕著に改善した例などを含め、少年の非行と双極性障害が密接に関連していると思われる事例が多々見られることを報告し、成人とほぼ同等の比率で見られる児童～青年期の双極性障害を正しく診断し治療することの必要性を述べている。

すなわち、本研究の対象者達の示した気質得点と企業に勤めている人々の気質得点の値に相違が見られたことから、双極スペクトラムとの結びつきが強い性格質問紙である TEMPS-A の使用によって幅広い概念で双極性障害を捉えることが児童～青年期の双極性障害をより正しく診断・治療する助けになる可能性も示唆されたと考えられる。

3. 最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。まず、虐待に関する情報は、少年達が虐待された記憶を封印していたり、認めたくないがゆえに否認する等の心理的な働きが回答に影響を及ぼした可能性がある。かつ、虐待を受けた時期や期間に関しては情報が得られていないという限界を抱えている。さらに、特定の気質を持つ人々は過去の記憶をより被害的に受け止めたということや特定の気質の子どもは虐待を招きやすいということが本研究の結果に影響を与えている可能性も考えられる。

また、本研究では調査の対象が男子の入所者のみであったため、性的虐待を受けた経験があるものが非常に少ないために調査項目として採用すること

ができず、性的虐待が気質の形成に及ぼす影響については調べることができなかった。さらに、女子と男子では幼児期の体験がその後の気質の形成に及ぼす影響が異なる可能性があるため、今後は女子も対象として調査を行うことが必要であると考えられる。

## 結論

死生の意味や人生の危機に極めて密接な関連を持つと考えられる「気質」と「非行・犯罪」と「気分障害」という3つの側面から、虐待が少年達の人生に及ぼす影響について検討することを目的とした質問紙調査を行った結果、抑うつ気質はネグレクトと有意な関連 (odds ratio =3.7,  $p<0.001$ ) が認められ、循環気質は精神的虐待と有意な関連 (odds ratio =2.1,  $p<0.05$ ) が認められ、焦燥気質も精神的虐待と有意な関連 (odds ratio =2.5,  $p<0.01$ ) が認められた。

虐待による人格(気質)の変化に関する先行研究は既に存在しているが、本研究は双極スペクトラムとの結びつきが強い性格質問紙である TEMPS を使用したことにより、ネグレクトおよび精神的虐待が双極スペクトラムと関連する気質と有意な関連を有することが確認された。

児童思春期の気分障害は成人の気分障害と比較して病像の非定形性や頻回な病相の反復、気分動揺の振幅が軽微などの特徴が認められ、また、児童思春期独特の気分の変動の激しさゆえに逸脱行動や非行が患者の性格に帰されやすいため躁状態と逸脱行動の関連は評価が難しく、成人と比べて双極性気分障害の診断が見落とされやすい傾向がある。そのため、児童～青年期の双極性障害を正しく診断し治療することが求められているといえるであろう。そして、本研究の結果から、双極スペクトラムとの結びつきが強い性格質問紙である TEMPS-A の使用により、より幅広い概念で双極性障害をとらえることが児童～青年期の双極性障害をより正しく診断・治療する助けになる可能性も示唆されたと考えられる。

また、ネグレクトおよび精神的虐待は、身体的虐待と比し目に見えにくい

ものであるだけに発見が容易ではないため、学校の教師等は子どもの性格的な変化や気分障害およびうつ状態や躁状態の存在により敏感になる必要がある。そして、それを支援するツールとして、TEMPS-A が活用できる可能性もある。

このように、双極性障害を正しく診断・治療することや、被虐待の現状を早期に発見すること、そしてこれらと関連し起こる犯罪や苦悩や悲劇的な死を未然に防ぐことは、本人および他者のよりよき生に深く関わることは言うまでもない。

一方、身体的虐待は気質との有意な関連が示されなかった点や性的虐待に関する検討については今後の課題として残された。

#### ■参考文献

- Akiskal, HS, Khani, MK, Scott-Strauss, A. (1979) Cyclothymic temperamental disorders. *Psychiatric Clinics of North America*, 2, 527-554.
- Akiskal, HS and Mallya, G. (1987). Criteria for the “soft” bipolar spectrum: Treatment implications. *Psychopharmacol Bull*, 23, 68-73.
- Akiskal, HS, Placidi, GF, Signoretta, S, Liguori, A, Gervasi, R, Maremmani, I, Mallya, G, Puzantian, VR. (1998). TEMPS-I: Delineating the most discriminant traits of cyclothymic, depressive, irritable and hyperthymic temperaments in a nonpatient population. *Journal of Affective Disorders* 51, 7-19.
- Akiskal HS and Pinto O. (1999). The evolving bipolar spectrum. Prototypes I, II, III, and IV. *Psychiatric Clinics of North America*, 22, 517-534.
- Akiskal HS, Akiskal KK, Haykal RE, Manning JS, Connor PD. (2005). TEMPS-A: progress towards validation of a self-rated clinical version of the Temperament Evaluation of the Memphis, Pisa, Paris, and San Diego Autoquestionnaire. *Journal of Affective Disorders*, 85, 3-16.
- 秋山剛、酒井佳永、松本聡子 (2007). 双極スペクトラムと気質. *こころの科学*, 131, 53-56.
- Bagley C and Mallick K. (2000). Prediction of sexual, emotional, and physical maltreatment and mental health outcomes in a longitudinal cohort of 290 adolescent women. *Child Maltreatment*, 3, 218-226.

- Carter JD, Joyce PR, Mulder RT, Luty SE. (2001). The contribution of temperament, childhood neglect, and abuse to the development of personality dysfunction: a comparison of three models. *Journal of Personality Disorders*, 15, 123-135.
- Craig RJ, Ammar A, Olson RE. (1998). Psychological assessment (MMPI-2) of male African-American substance-abusing patients with and without histories of childhood physical abuse. *Journal of Substance Abuse*, 10, 43-51.
- Harrington D, Black MM, Starr RH Jr, Dubowitz H. (1998). Child neglect: relation to child temperament and family context. *American Journal of Orthopsychiatry*, 68, 108-116.
- 法務総合研究所 (2001). 児童虐待に関する研究 (第1報告). 法務総合研究所報告, 11.
- 法務総合研究所 (2004). 平成16年犯罪白書.
- 古田薫 (2002). 少年院在院少年の非虐待経験の実態と教育・治療. *アディクションと家族*, 19, 167-181.
- Johnson JG, Cohen P, Smailes EM, Skodol AE, Brown J, Oldham JM. (2001). Childhood verbal abuse and risk for personality disorders during adolescence and early adulthood. *Comprehensive Psychiatry*, 42, 16-23.
- 北村俊則 (2003). 児童虐待が成人期の気分障害・不安障害に与える影響. *精神科診断学*, 14 (1), 99.
- 小林寿一 (1996). 犯罪・非行の原因としての児童虐待. *犯罪と非行*, 109, 111-129.
- 工藤行夫 (2005). 双極性傷害 (特に躁病相) と司法精神医学との関り. *精神科治療学*, 20 (12), 1209-1514.
- Matsumoto S, Akiyama T, Tsuda H, Miyake Y, Kawamura Y, Noda T, Akiskal KK, Akiskal HS. (2005). Reliability and validity of TEMPS-A in a Japanese non-clinical population: application to unipolar and bipolar depressives. *Journal of Affective Disorders*, 85, 85-92.
- Mendlowicz MV, Jean-Louis G, Kelsoe JR, Akiskal HS. (2005). A comparison of recovered bipolar patients, healthy relatives of bipolar probands, and normal controls using the short TEMPS-A. *Journal of Affective Disorders*, 85, 147-151.
- 中谷陽二 (2007). 躁と逸脱. *こころの科学*, 131, 32-35.
- 野村俊明, 奥村雄介, 青島多津子 (1999). 躁状態で非行を重ねた少女の一例——双極性気分障害と少年非行の関連について——. *犯罪学雑誌*, 65 (2), 61-65.
- 野村俊明, 奥村雄介, 西松能子, 遠藤俊吉 (2000). 双極性障害と少年非行の関係についての研究. *犯罪学雑誌*, 66 (1), 21-29.

- Placidi GF, Signoretta S, Liguori A, Gervasi R, Maremmani I, Akiskal HS. (1998). Semi-structured affective temperament interview (TEMPS-I) Reliability and psychometric properties in 1010 14-26-year-old students. *Journal of Affective Disorders*, 47, 1-10.
- Sakai Y, Akiyama T, Miyake Y, Kawamura Y, Tsuda H, Kurabayashi L, Tominaga M, Noda T, Akiskal K, Akiskal H. (2005). Temperament and job stress in Japanese company employees. *Journal of Affective Disorders*, 85, 101-112.
- 田村立、遠藤太郎、染矢俊幸 (2006). 虐待が脳におよぼす影響. *精神医学*, 48 (7)、724-732.
- 田村立、杉山登志郎 (2007). 虐待を受けた子どもの予後. *小児科臨床*, 60 (4)、751-759.
- Widom CS. (1989). The Cycle of Violence. *Science*, 244, 160-166.

(まつもと・さとこ グローバル COE 死生学研究室研究拠点形成特任研究員)

(あきやま・つよし NTT 東日本関東病院精神神経科部長)

(たじま・ひでき 矯正研修所東京支所教官)

(あさの・ちあき 府中刑務所分類審議室法務技官)

(よしなが・ちえこ 東京少年鑑別所医務課医師)

(のむら・としあき 日本医科大学教授)

(さかい・よしえ 順天堂大学医学部精神医学教室助教)

(みやけ・ゆうこ 国立精神・神経センター精神保健研究所精神保健計画部統計解析研究室長)

(アキスカル・ハゴップ University of California San Diego, International Mood Center director)

(アキスカル・カリーン University of California San Diego, International Mood Center researcher)

## Experience of Abuse Andneglect : Its Relationship with Criminal Living of Boys

Matsumoto Satoko / Akiyama Tsuyoshi  
Tajima Hideki / Asano Chiaki / Yoshinaga Chieko  
Nomura Toshiaki / Sakai Yoshie / Miyake Yuko  
Akiskal Hagop / Akiskal Kareen

Abuse, affective disorders and criminal behavior are associated problems in death and life studies. In this research, we examined the relationship among the experience of abuse, affective temperament and criminal behavior as measured by TEMPS-A in 281 teenage boys in correctional facilities in Japan. The results of logistic regression analysis were as follows.

1) Depressive temperament had a significant relation with neglect (odds ratio =3.7,  $p<0.001$ ).

2) Cyclothymic temperament had a significant relation with psychological abuse (odds ratio =2.1,  $p<0.05$ ). The same was true for irritable temperament (odds ratio =2.5,  $p<0.01$ ).

3) Anxious and hyperthymic temperaments did not show any significant relationship with abuse or neglect.

Since the experiences of abuse and neglect were related with temperaments as measured by TEMPS-A, there is a possibility that TEMPS-A offers a measurement tool of mood disorder-related temperaments which influence not only the appearance of mood disorder but also criminal behavior.. Such efforts might prevent the subsequent occurrence of mood disorder and criminal behavior.